

北東イタリア諸方言における 談話標識のマイクロ・バリエーション

東京外国語大学

土肥 篤

dohi.atsushi.p0@tufs.ac.jp

はじめに

- ヴェネト州で話される方言（ヴェネト語、以下例文のあとにVe）に現れる*ciò* (< *tor* 'to take'; Marcato & Ursini 1998: 289)とトレンティーノ＝アルト・アディジェ州トレント県トレント市周辺で話される方言（ヴェネト語とロンバルディア語の中間地域、以下Tr）に現れる*tòi* (< *tòi* 'you'; Cordin & Dohi in press) :

(1) Ciò, sto parlando con te, tonto! (Ve)
PRT AUX 話す と 君 まぬけ
「ねえ、君と話してるんだよ！」 (Penello & Chinellato 2008: 115)

(2) Tòi, la gh' è vegnuda pròpri bèn sta tórta! (Tr)
PRT それが IO AUX できた 本当に よく この ケーキ
「このケーキ、本当にうまくできたね！」 (Casalicchio & Cordin in press)

- *ciò*は聞き手の注意をひく働き、*tòi*は話し手の文の内容に対する驚きを表す。

本発表の枠組みと目的

- 理論的枠組み

- 文の左方周縁部（left periphery）に対するカートグラフィー・アプローチ（Rizzi 1997; 日本語で読めるものに遠藤 2009）
 - しばしば談話標識（discourse markers）を観察の対象として発展してきた。
- （北）イタリア諸方言とマイクロ・バリエーション：

«[...] the dialects spoken in this area are quite homogeneous from a lexical, morphological, and syntactic point of view. They represent an ideal ground for analyzing microvariations in syntax, as the grammatical systems compared do not differ very much from one another. Thus, this is as near as we can get to a controlled scientific experiment, in which grammatical systems that differ only on the basis of a single feature are compared.» (Poletto 2000: 3)

- 目的

- イタリア語に現れる談話標識との比較を通してciòとtòiの性質について概観する。
- その観察から左方周縁部の特徴に関して得られる知見について検討する。

イタリア語の文頭に現れる談話標識

- *ciò*も*tòì*も文頭および文末（もしくは、特定のイントネーションを伴って文中）に現れるが、本発表では文頭に現れるものに限って観察する。
- イタリア語（以下It）を含む北東イタリアで話される言語には、様々な談話標識が文頭に現れる。
- 代表的なものに*sai*（< *sapere* 'to know'）のような動詞の命令形に由来するものと*tanto*（< *tanto* 'much'）のような副詞に由来するものがある。

(3) Sai, non hai mica ragione. (It)
PRT NEG 持つ PRT 道理
「ねえ、君が正しいわけじゃないよ。」 (Cardinaletti 2015: 73)

(4) Tanto non succederà mai. (It)
PRT NEG 起こる 決して
「どうせどんなことは絶対に起こらない。」 (Dohi 2020: 4)

文頭に現れる談話標識：動詞タイプ

- **ciò**と**tòi**は動詞タイプと副詞タイプのどちらとも異なる特徴を持つ。
- 動詞タイプの談話標識 (**vara 'look'**、**senti 'listen'**) は**ciò/tòi**より前に現れる：

(5) Vara, ciò, so drio parlare co ti! (Ve)
PRT PRT いる 後ろに話す と 君
「ねえ、君と話してるんだよ！」

(6) Senti, tòi, la gh'è vegnuda pròpri bèn sta tórta! (Tr)
「ねえ、このケーキは本当にうまくできたね！」

- **vara/senti**と**ciò/tòi**は（おそらく）異なる位置に現れる
 - カートグラフィーの前提では異なる位置に現れる要素は異なる機能に紐づけられる

文頭に現れる談話標識：副詞タイプ

- イタリア語における副詞タイプの談話標識はRizzi (1997)のいうForcePの位置に現れる (cf. Dohi 2020)。
- これは、たとえばtantoが呼びかけより後に現れることからわかる：

(7) Maria, tanto la mia pazienza è finita. (It)
きる 「マリア、どうせ私は我慢の限界だよ。」 マリア PRT ART 私の 忍耐 COP 尽

- 一方で、ciòとtòiはどちらも呼びかけよりも前に現れる：

(8) Ciò Maria, quando xe che se catémo
PRT マリア いつ COP COMP 私たちを 会う
pa 'ndare a sena fora? (Ve)
PRT 行く に 夕食 外に
「ねえ、マリア、いつ夕飯を食べに行く？」

(9) Tòi, Maria, la gh'è vegnuda pròpri bèn sta tórta! (Tr)
「ねえ、マリア、このケーキは本当にうまくできたね！」

文頭に現れる談話標識の語順

- ForcePはCPのうち最も上位に位置し、発語内行為と文タイプに関わる機能を担う（cf. Rizzi 1997）。
- 呼びかけはForcePよりさらに上、したがってCPより高い位置に現れる（cf. Moro 2003）。
- 呼びかけよりさらに前に現れる*ciò*と*tòi*はそれよりもさらに高い位置にある。
- 動詞タイプの談話標識はこれらの要素のうち最も高い位置に現れる。
- 以上から、文頭に現れる談話標識の語順は次の通り：
guarda/sai (vara/senti) > *ciò*/*tòi* > 呼びかけ > ForceP (tanto) > (文の本体)

ciòとtòi：意味

- 以上の観察から、ciòとtòiは近い（おそらく、同じではない）位置に現れていることがわかる。
- 一方で、ciòとtòiは意味と統語の双方の観点において異なる点を持つ。
 - tòiはciòと比べてForcePとより密接に関連している。
- 意味・語用論上の機能について、ciòが（少なくとも、平叙文では）聞き手の注意をひく働きをし、イタリア語における呼びかけや動詞タイプの談話標識に近い機能を持つ（cf. Bazzanella 2001）のに対し、tòiは文の内容に対する話し手の主観的な態度を表す点においてむしろ副詞タイプの談話標識に近い（cf. Dohi 2020）。
 - 後者の機能は典型的に発語内行為に結びつけられ、発語内行為はForcePが担う機能なので、tòiはForcePと関連しながらその意味機能を果たしている。
 - ciòは場合によっては「軽い驚き」*lieve sorpresa*（Penello & Chinellato 2008: 114）を表すが、この用法が現れる文はciòなしでも同じニュアンスを持つことが多い：

(10) Ciò, vara qua chi che ghe zé!
PRT 見ろ ここに 誰 COMP そこに COP

「おい、こんな奴がいるぞ！」（Penello & Chinellato 2008: 115-118）

ciò と tòi : 統語

• 統語的特徴について、ciòとtòiの最も顕著な違いは、文タイプとの関連にある。

➤ ciòは現れる文タイプについて特に制限を受けない。

➤ 平叙文(1)、命令文(10)に加えて疑問文にも問題なく現れる：

(11) Ciò, gheto capio? (Ve)
 PRT AUX わかった
 「ねえ、わかった？」 (Penello and Chinellato 2008: 115)

(12) Ciò, cossa i vol? (Ve)
 PRT 何 彼らは 求める
 「ねえ、彼らは何がしたいんだ？」 (Cardinaletti 2015: 78, fn. 3)

➤ 一方、tòiは疑問文には現れられない：

(13) *Tòi, sarài rivadi? (Tr)
 PRT AUX 着いた

➤ 文タイプもForcePの担う機能なので、やはりtòiはciòと比べてForcePと密接に関わっている。

談話標識と文タイプ

- 文タイプに関する制限を受けることは、談話標識が典型的に持つ特徴の一つである。
- イタリア語においても、動詞タイプのもの(14)・副詞タイプのもの(15)・さらに文中に現れる談話標識（いわゆる心態詞 modal particle）(16)が全て同様の制限を受ける：

(14) *Sai, sei pronto? (It)
PRT COP 準備ができた (Cardinaletti 2015: 79)

(15) *Tanto lascialo sul tavolo. (It)
PRT それを置け 上に 机 (Dohi 2020: 7)

(16) *Telefonagli poi!
彼に電話しろ PRT

ForceP と 談話標識

- 談話標識の中でも、心態詞が持つ文タイプに依存した分布については先行研究でしばしば言及されている（Thurmair 1989, Abraham 1995など）。
- 近年の研究では、このような分布は一致（Agree; cf. Chomsky 2000, 2001）システムを用いて説明されている（たとえば、Bayer 2012, Coniglio & Zegrean 2012）。
- こうした研究では、心態詞が文タイプに依存していることはForcePと心態詞の間に起こる義務的な一致によって説明される。
- 一方で、Chomsky (2001, 2002)の提案する一致現象は探査子（Probe）が目標（Goal）をc統御（c-command）していることを条件とする。
 - つまり、高い位置にある要素（ForceP）と低い位置にある要素（心態詞）の間に起こる。
 - 北東イタリア諸方言における談話標識は、ForcePに対して相対的に高い位置にあるにも関わらず文タイプに依存する（スライド7を参照）。
 - チョムスキアンな一致システムでは、このような分布を説明できない。

談話標識のバリエーションと一致

- Egg & Mursell (2016)はPesetsky & Torrego (2007)の提案する、よりフレキシブルなバージョンの一致システムを採用してForcePと談話標識の一致を分析している。この分析によれば：
 - a) 一致は一番低い位置にある要素だけが特定の性質（値を持つ素性 **valued feature**を持つこと）を持っていれば起こることができる。
 - b) 一致は二つの要素だけでなく、三つ以上の要素の間で起こることができる。
 - c) ForcePとフォーカスを受ける要素の間にはあらゆる文で常に一致が起こり、談話標識はこの一致に第三の要素として参加する。
- この分析を採用するメリットは、談話標識の現れる位置に関わらずその文タイプ依存を説明することができる点にある。
- **tòì**がForcePと密接に関わっているのに対して**ciò**がそうでないことは、前者がこの一致に参加するために必要な素性（**unvalued focus feature**）を持つのに対して後者が持たないためであると考えられる。

まとめ

- 北東イタリア諸方言には豊富な談話標識が現れる。
 - 特に、ヴェネト州で話される方言に現れる*ciò*とトレント県で話される方言に現れる*tòi*は特殊な性質を持つ。
- これらの語はどちらもCPの外に現れる一方で、*ciò*がCPに対して独立した性質を持つのに対して、*tòi*はかなりの程度依存している。
- このようなバリエーションは、談話標識とForcePの関連をPesetsky & Torrego (2007)の提案する一致システムを用いて分析するべきであるとする立場を支持している。

参考文献

- Abraham, Werner. 1995. Wieso stehen nicht alle Modalpartikel in allen Satzformen? Die Nullhypothese. *Deutsche Sprache* 23. 124–146.
- Bayer, Josef. 2012. From Modal Particle to Interrogative Marker: A Study of German denn. *Functional Heads: The Cartography of Syntactic Structures* 7(1). 1–18.
- Bazzanella, Carla. 2001. I segnali discorsivi. In Lorenzo Renzi, Giampaolo Salvi & Anna Cardinaletti (eds.), *Grande grammatica italiana di consultazione, vol. III*, 225–257. Bologna: Mulino.
- Cardinaletti, Anna. 2015. Italian verb-based discourse particles in a comparative perspective. In Josef Bayer, Roland Hinterhölzl & Andreas Trotzke (eds.), *Discourse-oriented Syntax*, 71–91. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Casalicchio, Jan & Patrizia Cordin. In press. *Grammar of central Trentino*. Leiden/Boston: Brill.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels & Juan Uriagereka (eds.), *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89–156. Cambridge: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 1–52. Cambridge MA: MIT Press.
- Coniglio, Marco & Iulia Zegrean. 2012. Splitting up force: Evidence from discourse particles. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman & Rachel Nye (eds.), *Main clause phenomena. New horizons*, 229–255. Amsterdam: John Benjamins.
- Cordin, Patrizia & Atsushi Dohi. In press. *Particelle modali. Un confronto tra dialetti trentini e ladino fassano*. Mondo ladino 2020.

参考文献

- Dohi, Atsushi. 2020. CP-internal Discourse Particles and the Split ForceP Hypothesis. *Lingua* 233.
- Egg, Markus & Johannes Mursell. 2016. The syntax and semantics of discourse particles. In Josef Bayer & Volker Struckmeier (eds.), *Discourse Particles*, 15–48. De Gruyter.
- Marcato, Gianna & Flavia Ursini. 1998. *Dialetti veneti. Grammatica e storia*. Padova: Unipress.
- Moro, Andrea. 2003. Notes on vocative case. A case study in clause structure. In Josep Quer, Jan Schroten, Mauro Scorretti, Petra Sleeman & Els Verheugd-Daatzelaar (eds.), *Romance Languages and Linguistic Theory 2001 : Selected Papers From "Going Romance,"* 247–261. Amsterdam: John Benjamins.
- Penello, Nicoletta & Paolo Chinellato. 2008. Le dinamiche della distribuzione di *ciò* in veneto. Breve saggio di microvariazione. In Gianna Marcato (ed.), *L'Italia dei dialetti*, 113–120. Padova: Unipress.
- Pesetsky, David & Esther Torrego. 2007. The syntax of valuation and the interpretability of features. In Simin Karimi, Vida Samiiian & Wendy Wilkins (eds.), *Phrasal and clausal architecture: Syntactic derivation and interpretation*, 262–294. Amsterdam. <https://doi.org/10.1075/la.101.14pes>.
- Poletto, Cecilia. 2000. *The higher functional field: evidence from Northern Italian dialects*. New York: Oxford University Press.
- Penello, Nicoletta & Paolo Chinellato. 2008. Le dinamiche della distribuzione di *ciò* in veneto. Breve saggio di microvariazione. In Gianna Marcato (ed.), *L'Italia dei dialetti*, 113–120. Padova: Unipress.
- Rizzi, Luigi. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In Liliane Haegeman (ed.), *Elements of grammar. Handbook of generative syntax*, 281–337. Kluwer: Dordrecht.
- 遠藤喜雄 (2009) 「話し手と聞き手のカートグラフィー」 『言語研究』 136. 93–119.